

小ゆび折り年數へては今更にさびしうなりぬ聲
 や立てまし。時折りは忘れやせむと我が年を我
 が名をひとり口ずさみする。火桶などかこみて
 あまた語らへば手の氣にかゝる冬の夜哉。もの
 思ふわれさまたげん何ものどあらずうれしき天
 となりけり。明日の日はわれ知らねどもしか
 れどもゆきつく迄をゆき／＼てみまし。世馴れ
 たる人のよくするあしらひをそと眞似てわが心
 笑ひぬ。電燈のふと消えてけるたまゆらにうれ
 しくもわきぬ幼き心。つくねんと眺めてあれば
 どもすれば君も見えなく我も見えなく。なにや
 らむものゝ失せたるこゝちする余りに多くかた
 りし我は。口とくもあらがひければわが心うつ
 ろになりぬさびしいかなや。蛇が来る盗人が来
 るとひたぶるに恐ろしかりし夜の口笛。文机に
 雖ならべて友あまたすわれはをるさびしう
 なりぬ。文机に雖段なんごしつらへるしばしの
 我の和げる心。雖祭るかゝるさびのいつまで
 もうれしといふがうれしかりけり。(破常)

ギリシャの地山高く水清きこゝ今尙千古の
 如し。ローマの府繁榮の津にして文化の中
 心たるこゝ古昔に譲らす。而も古の文化に
 して富強なる民族社會は今何の所に在
 る。古の猶太國は大民族なり。一度その社
 會組織の滅亡せしより其の子孫離散して世
 界に漂泊す。今の猶太人は智巧人に絶し、
 財力他を壓す。歐洲人の畏れて忌む所たり。
 而も歸するに故國なく他人の國に浮浪して
 其の苛酷なる鞭撻に甘んず。個人智にして
 且つ富むといへども、合同して民族社會を
 成し、其の獨立を維持するにあらざれば、
 以て世界生存競争に對峙する能はざるこゝ
 知るべきなり。—愛國心—(種積八束)

報 録

◎第廿八回文科學術談話會記事

大正三年二月二十一日開催しました。その席
 上で最近歐洲から御歸朝になりました保科先生
 から興味あるお話を承ることが出来ましたこと
 を深く先生に感謝致します。

講演順序

- 一 將來の婦人 保科 先生
- 一 中世の心に就て 文二 荻野よし
- 一 東京市の交通 文三 窪田 けい

本會も次第に發展に向ひつゝあります。自由
 自由なより充實したものにせねばならぬと存じ
 ます。何處にかうつろがあるやうな氣がしてな
 りません。會員諸姉の御努力を切望します。

◎退會者 (文科會賛助員)

阿部 みな 大正三年一月退會

相川 みほ	全
岩井 ます	全
五十嵐せい	全
大野 ゆき	死亡
加藤 雛	明治四十五年退會
白川 まり	大正三年一月退會
篠木 千代	退會
高園 すゐ	大正三年二月退會
中川 いと	退會
濱野 ひで	大正二年十一月退會

◎第七回會計報告

収入 金八拾參圓五拾貳錢

内 譯

金參拾圓貳拾壹錢

前より繰越 高

金貳拾圓五拾五錢 會員よりの會誌代
 金參拾壹圓五拾錢 費、助員二十六人分會
 金壹圓 下村先生より御寄附
 金貳拾六錢 利子
 支出 金四拾壹圓四拾錢

内 譯

金參拾五圓參拾九錢 會誌七號印刷代
 金參圓 會誌發送代
 金貳圓 伊澤先生へ謝禮
 金壹圓拾錢 其他雜費
 差引殘高金四拾貳圓拾貳錢



◎母校たより

○大正第二の新年は大なる抱負を以て徐かに歩み來り申候、御代始めての祝賀式は講堂に於て

し言の由に承り候、善は必ずなせ悪は小なりともなす勿れとの力ある御聲は今なほ耳底にひびき居り候

○本校講師保科孝一先生新に御歸朝せられ候て文科三年の言語學を擔當せられ候

○限りなき平和の中に大正の新らしき紀元節を迎へ申候、午前祝賀式あり、教育勅語についで憲法發布に關する勅語を奉讀せられ候、遠く二千五百七十四年の昔、雲に聳ゆる高千穂の峰の白雲わけまして、青山四周の國に入らせ給ひける、皇祖の創業を仰ぐと共に、明治天皇の大偉業を偲び申候、此の偉大なる過去を讚美し希望多き將來を祝揚し滿腔の誠意をこめて祝賀のまごゝめを開き申候

○東校舎の建築工事は愈々進行いたし候て煉瓦校舎の後の空地は二棟の校舎にてみたまされ申候寄宿舎の玄關も只今工事中にて漸く舊觀を改めんといたし居り候

○四年生の卒業も日を以て數ふる様相成り候十三日宮城拜觀もすみ申候、人事と思ひ居りし奉

◎大正元、二、三年度分納附者

小川くんに 齋藤美禾 佐藤をみの
 磯島ツチノ 落合さよ

以上五名 金拾圓五拾錢

大正元、二年度分納附者

相川みほ 三宅こゝ 新家みす
 鈴木ふみ 高圓すゝ 五十嵐せい
 和 すみ 岩井ます

以上八名 金拾壹圓貳拾錢

◎大正元年度分納附者

清水しづ 杉山もこ 鈴木正
 河口せい 安藤しげ
 以上五名 金參圓五拾錢

舉行せられ候、校長より吾人の修養につき最も切實なる御訓話を承り申候、修養は掃除の如きものなりとは故の校長中村先生の生徒に諭され

職地の心配も今は我事に候、最後の學び舎を捨つる悲しみ御察し下され度候、蕾もかたき櫻の梢を仰ぐ時、我等の眼はくもるを覺え申候

○最後にきこえ上げたきは三月十二日簡野道明先生、下田たづ先生、波佐谷みち先生御退職遊されしことに候、我等が多年御薫陶を受けし諸先生に別れ奉るは、御同様誠に悲しきことに御座候。以上。

◎彦根より

御葉書拜見仕り候、愈御機嫌よく御つごめの由大慶の至に御座候、御繁忙中を會のため御盡力下され候事深く感謝し奉り候、御互に思ひ出おほき春は又も參り申候、博覽會に立ちて上野の花はもはや綻びをめし由のたより聞くからに彼の限りなき光榮と希望と歡喜とを以てさらば吾が友吾が學び舎とつきぬ名残を惜しみつゝふりかへりふりかへり都門を辭せし卒業當時の春の忍ばれて半ば嬉しく半ば悲しく感慨無量懷舊の情抑へ難く存候、大なる抱負を以て臨みしこ